

はじめまして&おひさしぶり。本日は御立寄りありがとうございます。  
 「有栖山 葡萄(ありすやま ぼどう)」と申します、しがないSS書き同人屋でございます。

有栖山公園設立11年。同人小説サークルとして活動を始めて早3年。時の経つのは早いもので……  
 その間に生活環境も大きく変わり、同人活動をやっていくにはかなりつらい状況に。とはいえ嫌いではない、むしろ好きと言えるこの趣味を辞めてしまうのは忍びなく。ということで、老体に鞭を入れながら楽しんでいこうと思っております。大作志向ではないですが、今書き始めてる「恋戦」はなんとしても書き上げたいなというのがありますしね。それと、セミオリジナルSS小説「蒼きウル 有栖山版」も近いうちにお見せできればと思う次第です。今後ともお付き合いいただければ幸いです。

さて恒例、Web方面の告知です。  
 遙の病室があまりにも容態が悪く、一時閉鎖をして大手術が必要になっております。いったん遙外にはICUに移っていただくこと。原因不明の記憶喪失を直せるか。櫻総合病院副院長の腕の見せ所ですw 直らなかつたら……退院していただくしかないですね(汗

では、今後ともよろしくお願いいいたします。次の夏も頑張るぞっ！

下校時刻。水月は、水泳部の練習があるといつて教室を出て行ってしまった。ここ数日の流れで行けば、遙がそろそろ教室に来るころなのだ、時計を見ると既に十分以上遅れていた。

「遙、どうしたんだろうな」  
 孝之はこのままじっとしていても仕方がないと、鞆を手に教室を出た。既に帰宅の時刻とは少しずれて、生徒の姿はちらほらというほどに減っていた。昇降口に向かい、人気の少ない廊下を歩いた。

途中の廊下でいきなり、孝之の目の前に三人の男が立ちはだかった。中央に立っているのは、細身で長髪に眼鏡の神経質そうなタイプ。その右に、やたらと空間占有量の多い脂っこい暑苦しいタイプ。そして一番左に目の細い中肉中背の人畜無害そうなタイプ。

一瞬見た目で共通点が見受けられない彼らが、明らかに団体として三人横一列で孝之に面していた。そして、そのいずれの顔も孝之の記憶に無いものばかりであった。

中央の男が一步前へ、鳴海へと近づいた。  
 「我々連盟からの警告である。遙様に寄るな。以上だ」  
 いきなりこの事に、孝之は何の事やらわからずに気の抜けた顔をしていった。

「貴様、わかってないようだな。もう一度言ってみよう。遙様に近寄るな」  
 目の前の男が取った不遜な態度に、孝之は怒りを感じた。だいたい、人を貴様呼ばわりするのは許せん。かといって、この手合いにまともに怒鳴るのも馬鹿らしい。

「お前、き〇がいか？ それともなんとかウエーブか？ いずれにしろ相手にしてるほど暇じゃない」  
 鳴海は憐れみの目を向け、男に言い放った。そしてその場を立ち去ろうとした。

「そんな、き〇がいか伏字が必要な事を言うな。それにあんなグルグル電波集団といっしょにするんじゃない」  
 そう興奮気味にいうと、孝之の進路に立ちはだかった。

孝之は邪魔な連中に絡まれたと、陰鬱な気持ちになりながら真正面に立つ男を思いきり睨み付けた。男は一瞬ひるんだがすぐに立ち直り、眼鏡を触り孝之を見据えた。

「伏字ってなんだよ、訳わかんねえ。だいたいどう見たって、お前の言動は電波入ってんだろ」  
 孝之はめんどくさそうに、手をハエを追い払うようにひらひらと動かし相手との距離を取った。男はかなり単純な性格なのか、顔を赤くして怒りを露にした。が、一呼吸するといやらしい笑いを浮かべると孝之に応戦しはじめた。

「我々は聖遙親衛隊連合である。貴様のような凡人が、清らかなる遙様と付き合うなどということが許されようはずが無い」

「孝之の頭の上には、かなりの数の疑問符が浮かんでいるようだ。」

「セント？ 親衛隊？ 連合？？」

男は孝之を見下した視線で自らの言葉が続けた。

「遙様にはいくつもの親衛隊が存在している。通常は不可侵条約で互いの行動には干渉しない事になっている。が、今回は緊急事態ということと連合として使者を送り出す事となった。それが我々だ」  
 状況はおおよそ飲み込めてきたが、いかんせん突然かつ納得いかないことばかりで、孝之の我慢はそろそろ限界にきていた。

「俺はお前らに指図されるいわれはない」  
 孝之は、きつぱりと言いつつ放った。

「な、なんだよ。ぼくらの遙タンに近づくなよ」  
 うわ、本当に居るんだ、タンとかそういうことを言う奴が。孝之は妙な関心をしつつ、気味の悪さが背筋に走った。目の前の妙に湿気を帯びた男は、たいして動いても居ないのに息を切らせながら続けた。

「ぼ、ぼくらの、遙タンは美しいままでなきゃいけないんだ」  
 そう言う彼が胸の前で組んでいる手からは、白襟袴の制服と同じ色調の布が見え隠れした。それもかなり縮小された感じに。気になった孝之はすばやく一歩近寄ると、男の手から難なくその小さなものを奪い取った。

「な、なにをするんだよ。ぼ、僕の大事な遙タンをっ」  
 男は興奮し、奪い返そうと孝之に襲い掛かってきた。孝之はすつと身体をかすすと、相手の足元をすくった。勢いよく飛び込んできていた男は、バランスを崩すと自らの体重を支えきれずあつっけなく倒れた。

孝之は倒れた男の背中を踏みつけると、手にある奪ったものを確認した。それは全長五寸くらいの人形であった。

「人形？」  
 孝之が怪訝な声で言うと、足元から男が必死に涙声で叫ぶ。

「か、かせよ遙タンを。フルスクラッチで一ヶ月かけて作ったんだぞっ」  
 何の事か判らないが、いずれにしても遙の人形を作っているも持ち歩いてるといふ事らしい。なんとと言う気持ち悪い奴だ。しかし、精巧に出来ている。遙のアホ毛まで、よく再現されている。

「しかしよく出来てるな。ここはどうなってるんだ？」  
 孝之は何気にスカートを捲り上げた。あの三角地帯には白い木綿のショーツがきちんと穿かされていた。

「おまえっ、なんてことするんだよっ」  
 そう叫ぶ男を無視して、孝之は観察を続けた。

「なんてことって、お前が作ってんだろ。それにしても、遙はもつと胸大きいぞ。それに下着もこんな貧相な奴じゃなくて、ピンクのレースのついた可愛い奴を履いてるぞ」  
 孝之が何気に、いや意図して挑発するように足元の男に対して間違いを指摘した。

「むきー、なん、なんでおま、おま、きー」  
 男は、人で無い鳴き声を発する事しか出来なくなってしまうた。

<To be continued>